

## 〈特集〉: 台中からの多元文化交流と 社会・文化実践

これまで弊誌『多元文化交流』は、台湾と日本をはじめとした東アジア、およびその他の多くの諸地域にまたがる人の移動と交流にまつわる、多種多様な特集を組んで来た。だがその多くは、東海大学日本語言文化学系が所在する台中を拠点としてきた。

周知のように、台中市は人口 280 万人を超える台湾第二の大都市である。とはいえ、政治的・経済的な中心地である首都・台北や、清朝以来の遺構が多く残る古都・台南等に比べれば、台中は人口や経済規模のわりに、その特色が比較的イメージされ難い傾向がある。しかし台湾のなかで北部と南部の地理的な中間点に位置する台中は、さまざまな人々が行き交い、出会う交通の要衝である。多種多様な歴史背景や社会経済構造、言語集団と文化、政治勢力等が重なり合い、交差することで、巨大な圏域を構成しているのである。そのため台中を基点とすることで、逆に多元文化社会・台湾のさまざまな側面を考察できるともいえる。さらには近現代社会における人の移動と交流について、普遍的かつ国際的な視点から思考を深めることができると思われる。

2000 年代以降、台中に所在するいくつかの大学で「台中学」をテーマとして掲げた学術シンポジウムや講座が、幾度か開かれた。台中市政府による後押しもあり、歴史、地理、社会、経済、文化など多種多様な領域からの学問研究が進められてきたのである。東海大学でもまた、多くの学科の教員・学生が、台中学の視点から、地域のさまざまな領域の人々と提携しつつ、学術研究や社会実践活動を展開してきた。

一方、東海大学のなかでも日本語言文化学系は、はやくから、狭義の日本語教育の枠とアカデミズムの垣根を超え、地域のさまざまな人々との協働と社会実践をとおして、教育・学術活動を展開することを重視してきた。日本語という道具を媒介としつつ、地域社会の人々を巻き込みながら、さまざまな多元文化交流活動を展開する営為を、学科の核的理

念を体現する教育・学術活動として位置づけてきたのである。近年では、この長年の取り組みを背景に、他学科における台中学をめぐる各種活動との連携をはかってきた。

今回の弊誌特集「台中からの多元文化交流と社会・文化実践」は、たんなる地方学の枠組にとどまらず、弊誌の基本テーマである「多元文化交流」という観点から、台中という地理的な「場所」に改めて焦点を当てることで、この問題を考え直そうとするものである。台中の歴史的、社会的、文化的な固有の文脈のなかで、どのような多元文化交流の社会実践が可能なのだろうか。またそのなかで大学教育と学術活動はどのような役割を担うことができるのだろうか。さらに、こうした社会・文化実践をとおして、台中という都市空間をどのようにとらえ直し、さらには社会のあり方そのものをどう変革していくことができるのだろうか。

本特集では、これまで台中という場をフィールドとして、さまざまな形で社会的・文化的な活動を展開してきた人々による、学術論文や実践報告、エッセイなど多様な形式の文章を集めることができた。また、東海大学および日本語学文化学系の関係者以外からも原稿をいただいた。この特集をとおして、台中という場所および多元文化交流をめぐる諸問題について、活発な議論がひろく喚起されることを期待したい。